

報告

佐伯大空襲

昭和二〇年四月三〇日

佐伯海軍防備隊港内で起きた敷設艇怒和島の悲劇
米B二九爆撃機十一機飛来 爆弾二四二個投下
船尾に一発被弾 乗組員一四名戦死、沈没を免れ
大入島石間浦に擱座

高盛 西郷

(会員 佐伯市石間浦)

【はじめに】

今年、戦後七〇年目を迎える。

この悲劇は、終戦三ヶ月半前に起きた出来事であるが航海から佐伯海軍防備隊に帰港中、同港内で米軍機から爆撃され、港内を出た所で立ち往生していたのを島の三〇米の高台から目視した。小学校四年生に進級した九歳の時の事だった。

船は「怒和島」と云って全長七五米、七二〇屯の敷設艇

だった。豊後水道に敵潜水艦が入らないように機雷敷設や掃海、九州の沿岸警備、また、船団護衛などで台湾、沖縄周辺の東支那海、パラオ島へも行き任務を果たしていた。平成九年三月、佐伯市教育委員会の「佐伯市平和祈念文集―平和への祈りと戦争体験の記録―」に佐伯の海で起きた戦火の体験談として寄稿した。



佐伯市平和祈念館「やわらぎ」に置かれた初版本と改訂版

三八年後の昭和五八年四月三〇日、船員・遺族が佐伯に集まり、当石間公民館で慰霊祭が行われ、艇長のご子息様にお目にかかる。一四年後の平成九年一月に発刊された「敷設艇怒和島の航海」白石良氏著の小冊子をご子息様から戴く。又、平成二四年三月の改訂版を昨年八月同氏より戴き中学校の平和授業に使った。

小冊子は「佐伯市平和祈念館やわらぎ」に初版と改訂版の二冊が置かれている。当時の乗組員たちの行動や活躍が分かり、その奮闘ぶりを加筆し、佐伯湾で起きた本土空襲の記録として後世に伝えたものである。

軍都佐伯 佐伯海軍航空隊開隊

神代の時代から戦は絶えず、皇祖神武天皇は国を治めるため東征に赴く神話がある。日向の国（宮崎県美々津町）に日本海軍発祥の地として港に大きな碑が建っている。戦は絶えまなく続いてきた。

蒙古襲来（文永・弘安の役）や豊臣秀吉の朝鮮出兵など国外との戦い、近代史にみる明治の日清・日露戦争。

明治四四年一〇月下旬、日本海軍練習艦隊を率いて豊後水道沖で大訓練、戦艦「富士」には大正天皇（東宮殿下

の時）が坐乗され親閲、二、三日佐伯湾に停泊し郡民に迎えられ、大入島の石間山に登頂、駐蹕記念碑ちゅうりつが建立されている。大正時代には八代六郎海軍大將が卒練の合間をみて神武天皇の聖跡を一度、鈴木貫太郎海軍中將は二度も尋ねられ大入島日向泊浦に上陸している。

昭和一二年に日中戦争、昭和一六年からアメリカやイギリスなどとの太平洋戦争を続けて来た。昭和二〇年四月沖繩突入作戦に出撃のため、戦艦大和は六日夜半豊後水道を南下、大隅海峡を通り、七日、一四時二三分米軍機の攻撃により北緯三〇度四三分、東経一二八度〇四分撃沈された。この日大入島にも来島した事のある海軍大將鈴木貫太郎の内閣が成立、日本の行く末を決められ昭和二〇年八月一日、日本は降伏した。

あれから七〇年経つ今日である。

振り返れば、昭和六年東九州沿岸に海軍航空隊設置の話が持ち上がり、誘致合戦の末、明治の頃から良港であった佐伯に決まった。その時の調査は大入島荒網代浦（由が浦）が基地になった。

昭和九年に佐伯海軍航空隊が開隊された。一〇年に陸上の飛行場が完成。当石間浦は大入島の南部で基地とは

六〇〇余米離れた目と鼻の先にある。

昭和一二年の日中戦争では、第二二航空隊が佐伯で編成され、中国戦線に加わり出撃したと云う。

昭和一四年に佐伯海軍防備隊が宇佐海軍航空隊とともに開隊された。佐伯は海軍の最重要拠点の一つとなった。

昭和一六年は尋常小学校から国民学校に変わり、私たちが新一年生になった年、佐伯町と八幡、大入島、西上浦が合併し大佐伯市が誕生した。また、佐伯湾からハワイ真珠湾攻撃に機動部隊出撃、太平洋戦争が始まった年である。

当浦の環境は地形的に見て軍事上の要所にあつたように、幼いときから軍艦や飛行機を見慣れた風景だった。いざ戦争が始まっても、遠い見知らぬ他国での戦いで、幼い私共には良く分からなかった。

唯、小船に乗って出兵する人々をみんなで見送った。

敷設艇「怒和島」(七二〇屯)が佐伯防備隊附属となり呉より回航されたのは昭和一七年一月二〇日でそのまま任務に就いた。

二日後には、同じ敷設艇の夏島・那沙美(四四三屯)、黒神・片島(同じく七二〇屯)、そして電纜敷設艇の釣島(一

五六〇屯)などとともに佐伯を基地に、機雷敷設、掃海、船防護衛、沿岸警備、対潜掃討等に務め、豊後水道周辺から沖繩、台湾、バラオにも出撃した。

※電纜IIケーブル・絶縁体で覆った電線を束ねた物

昭和一八年八月一六日、怒和島に将旗が翻つたと云う。呉を出港してトラツク島に向かう戦艦大和以下艦隊に対し、怒和島に太田実少将が座乗、豊後水道の対潜掃討を行い、露払いを務めたのは名艇長久保忠彦の操艦だった。

本土大空襲 東京燃える

昭和一七年から一八年半ば頃までは勝ち戦であつたが後半から島々を奪還され、いよいよ昭和二〇年二月から六月かけて沖繩本土上陸作戦が展開された。

昭和一九年一〇月二五日には中国基地のB二九が北九州を空襲、いよいよ身近に迫つて来た。

佐伯の空にも秋頃から度々警戒警報・空襲警報を聞くようになった。島の山の段々畑からは航空隊・防備隊が真下でまる見えである。

昭和二〇年三月になると東京を大空襲、大阪。神戸も焼夷弾攻撃で火の海になったと云う。その話を熱心に聞

き、子供心に恐怖心につ、まれ怖かった。

昭和三〇年三月一〇日 集中的に攻撃してきた。

▼一〇日 B二九爆撃機二九八機から東京を空襲された。

▼一四日 B二九爆撃機、二七九機から大阪を焼夷弾攻撃された。

▼一七日 B二九爆撃機、三〇九機から神戸を焼夷弾攻撃された。

▼四月一日 米軍は沖繩に上陸 一斉に攻撃される。いよいよ本土上陸か、米軍機は「降参しろ」等の意味を書いた色つきのピラを撒く。舞いながら落ちてくるピラを、首を上げ数枚つかみ取った。

佐伯大空襲始まる

宇佐・中津・臼杵へと広がる

▼昭和二〇年三月一八日 朝八時三〇分頃、米軍のグラマンF六艦載機が佐伯を初空襲。午後三時三五分頃、宇佐海軍航空隊を空襲、四時過ぎには中津市今津の犬丸川河口付近を空襲された。

▼昭和二〇年三月一九日 午後四時過ぎ、臼杵市下ノ

江の住宅地を空爆された。

▼昭和二〇年四月二六日 早朝B二九爆撃機、一九機が七〇発の爆弾投下、馬場の共同防空壕に避難していた人々に直撃弾が落下、二八名が死亡。ケガ人が十数名出た。また、佐伯中学校校舎、城山山頂の毛利神社本殿が破壊された。佐伯駅前周辺も爆撃される。飛行機はサイパンから北上、鶴見崎半島方面から進入して来た。

▼昭和二〇年四月二九日 佐伯航空隊に「飛燕」一五機が飛来して来た。

▼昭和二〇年四月三〇日

敷設艇「怒和島」の悲劇

戦争末期の昭和二〇年四月三〇日、その日は月曜日で、いつもの通り学校に通っていたが、市内に警戒警報が鳴り出し、直ぐ空襲警報になったので皆んな家に帰った。午前一〇時頃、家の裏山（高さ約三〇米）に父が掘った防空壕に向かう途中、一隻の軍艦が航空隊東浜沖を入港するのを気にしながら必至に壕に駆け込んだ。逃げる悲しさを思い知らされた。

数日前も空襲がありB二九爆撃機とすぐ分かった。

「二〇時頃、機雷を積み込むため、怒和島は後進でゆっくりと岸壁に近づいた。距離が十数メートルになった時、艇からの「もやい」を受け取るため、待っていた水兵が短艇に飛び乗った。それとほとんど同時に、突然、空からヒューヒューという爆弾の投下音が聞こえはじめた。

「空襲だあ!」「伏せろ!」短艇に乗っていた者は、すぐに飛び上がり、防舷材などの陰に身をかくした。その後、海上幅数十メートルの帯状に、数え切れない程の爆弾が着弾、次々と炸裂し大きな水柱をあげた。

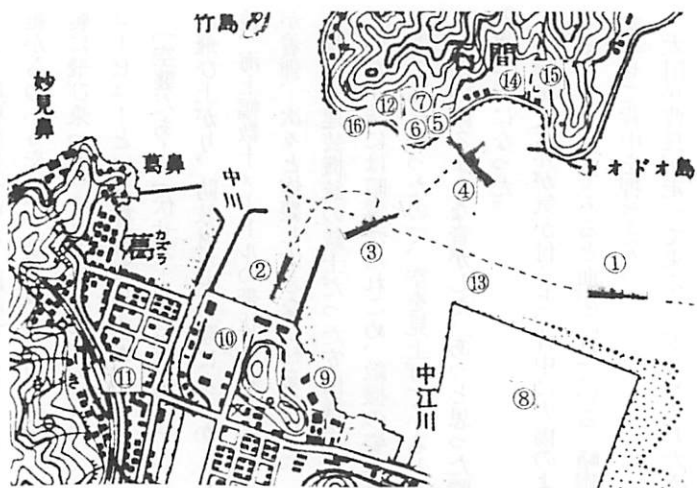
後部三連装機銃の銃士だった安田種夫は、配置についていたが空には暗雲がたれこめ、敵機の姿は見えず、爆音も聞こえなかつたので、空を見上げていると、突然、シューと雨の降るような音がした。あっと思った瞬間、目の前が真っ赤になった。

一瞬後、安井が気が付くと、背中に火傷のような痛みがある。手を当ててみると血が流れている。略帽をこぶしにかぶせて背中を押さえた。

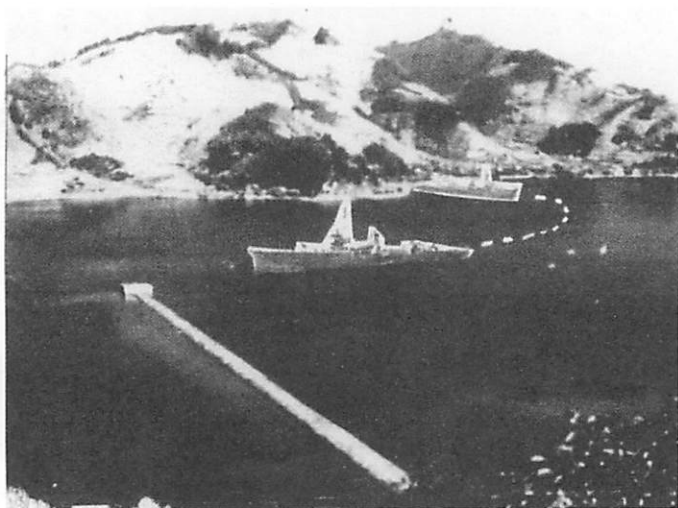
太田兵曹長が走って来る。「安井やられたか、前甲板まで行けるか。」「はい。」ふらふらと艦橋の所まで行き、そこで血を吐いて倒れた。



佐伯湾を拠点に活躍した敷設艇「怒和島」の勇姿
(全長 74.70m・速力 20K T・乗員 70 余名)



- ①艇入港発見 ②被弾 ③立ち往生 ④擱座 ⑤防空壕 ⑥小学校
 ⑦艇目視 ⑧航空隊 ⑨水上機 ⑩防備隊 ⑪佐伯駅 ⑫防空壕
 ⑬時限爆弾 ⑭石間公民館 ⑮神社 ⑯茶毘



昭和 20 年 4 月 30 日午前 10 時頃、目視した艇の停止位置、
 後進で石間浦センダノ木の浜辺に南向きに擱座

「被害報告せよ。」「艦尾、応答ありません。」

「機関室、浸水。主機 異常ありません。」

爆弾が小型だったこと、機雷を積み込む前だったことが幸いしたのである。

「両舷前進、全速。」

港外へ出た。面舵を切り、艦尾を対岸の大入島に向けると、「両舷逆進、一杯。」対岸までは八〇〇米である。ガリガリガリッと艦底が浅瀬をこする音がしたと思つたら、どつと乗り上げた。

沈没はまぬがれた。しかし、後部甲板は吹っ飛ばされ一部はめくれあがるような形で、後部機銃台のあたりから前におおいかぶさった。(敷設艇怒和島の航海より)

じつと壕で数分ぐらい待機していると、異常音がこの小高い山にも聞こえてきた。

壕から出て見ると、南西側の眼下に先程の軍艦が防備隊の東の突堤沖で、後部から黒煙を上げていた。西向きの状態で停止しており、約一〇分位立ち往生していた。人の叫び声やエンジンの音で慌ただしい軍艦の様子が太陽の反射を受けて目についた。

未だに東の突堤沖が艇の被弾位置ではないかと思われ

てならない。艇が立ち往生したのは、おそらく防備隊入港の指示待ちでなかったろうか。面舵から時間的にみても旋回の余裕がなかったはず、約十数分は経つただろうが、艇はそのままゆつくりと後進して、約八〇〇米離れた大入島の石間浦の西に近づき、字センダノ木の自宅近くに、南向きに錨を降ろし、船尾を乗り上げ擱座したのを目撃した。

久保艇長は赴任して二年半、佐伯湾を往来し佐伯の地理を身につけていたと思う。やはり乗組員の安全を第一に思っていたに違いない。目の前に広い石間港と人家、学校などがあり、敏速に判断したものと思う。

敵機は飛び去り、空襲警報は解除になったので高台から擱座した軍艦を見ながら家に帰った。昼食を済ませた頃、地区では「船が危険だから家から離れ、壕で待機するように」と触れがあり、少しばかりの「おやつ」を持って近所の壕にいった。一時間位経つただろうか、又「いつ機雷が爆発するか分からないから遠くに行くように」と触れが出た。皆、ひと浦西よりの字イヨノ(現大入島観光フェリー発着場の奥)に避難。私は山越えて防空壕にたどり着いた。壕の中は人が多く、交替で待機した。中江川河口

を眺めていると時々、鶴見方面に向かう船が通過後時限爆弾が爆発し、しぶきを上げたが運良く通過する船もあつた。

夕方四時頃だろうか。「もう大丈夫」と触れがあり家に向かった。

家の西隣の学校(石間分教場)は遺体の安置場になつていた。又、イリコ干場には大砲の弾や弾薬が種類別に浜いっぱいに並べられ、夕日を浴び光つていた。皆んな近寄つて見入つた。

夜は、学校も隊員の宿舎に当てられ、祖父母の家(築後三年)も幹部の宿になり、隊員は船に、基地に、民家にそれぞれ分散された。慌ただしい一日であつた。

「この日、爆撃を行つたのは、ゲラムを飛び立つた第三一四爆撃飛行団のB二九、一一機。目標は、その前日、敵機を迎撃するために、陸軍飛行第五六戦隊の三式戦闘機「飛燕」一二機が飛来していた佐伯飛行場であつた。B二九は海側東南方向からレーダーによつて進入し、五〇〇ポンド爆弾二四二個を目視で投下した。しかし、厚い雲にさえぎられて爆弾の大部分は海上に落下、飛行場は何もないところに行くつかの穴があいただけであつた。」

この時も敵機は鶴見崎半島方面から飛来して来た。

「米軍の空爆報告書には、「本任務飛行の爆撃精度は不満足であつた」「爆撃は目標区域外の佐伯湾に落下、駆逐艦らしき一隻に命中、大爆発を起こす」「艦艇は全長二〇〇フィート以下にして護衛艦タイプと見ゆ」とある。」

翌日から、朝夕の軍艦の旗の上げ下ろしも行われ、子供もながら、よく直立し敬礼したものだつた。

翌日は潜水夫が艇内を潜り、何人かの死体を上げ、立ち代わり浦人は悲惨な姿を覗き見した。艇の中には一三の遺体が発見され、日の経たないうちに字イヨノの先の磯辺で火葬にされ浦人は見送つた。尊い一三名の遺骨が学校に置かれた。後日、学校で葬儀が行われた。

五日後に現地で一人発見され、戦死者は一四名となつた。家の浜辺には、よく内火艇が着き白い軍服姿が目についた。今思えば久保艇長でなかつただらうか。

学校は氏神様境内を当てられたが、緊迫した空襲の中四ヶ月余、ともに授業ができずに過ごした。

地区では軍艦が敵機の的になると心配したが、戦時中の事であり、どうすることもできなかったと云う。

兵隊さん達は防空壕を掘ってくれたり、島を守ると言っ

て頑張っていたが二ヶ月後には、歯が抜けるように去っていった。

▼昭和二〇年五月四日 米軍機の空爆で「飛燕」一〇機が損傷被害を受けた。

▼昭和二〇年五月一日 九時頃、B二九爆撃機の爆撃で庁舎や飛行場南側が攻撃され、東西に広がる爆煙は二七発の爆弾の破裂によるものであった。

▼昭和二〇年五月一三日 米軍機動部隊は九州沖に接近、艦載戦闘機の攻撃で防備隊と航空隊が破壊的な爆撃を受け防備隊は三日三晩燃え続け全焼。この日は中江川沿いに近い兵舎や格納庫等破滅的な被害を受けた。

▼昭和二〇年五月一四日 前日同様主に航空隊を襲う。

▼昭和二〇年七月三日 B二九、一〇時頃一発灘に投弾。

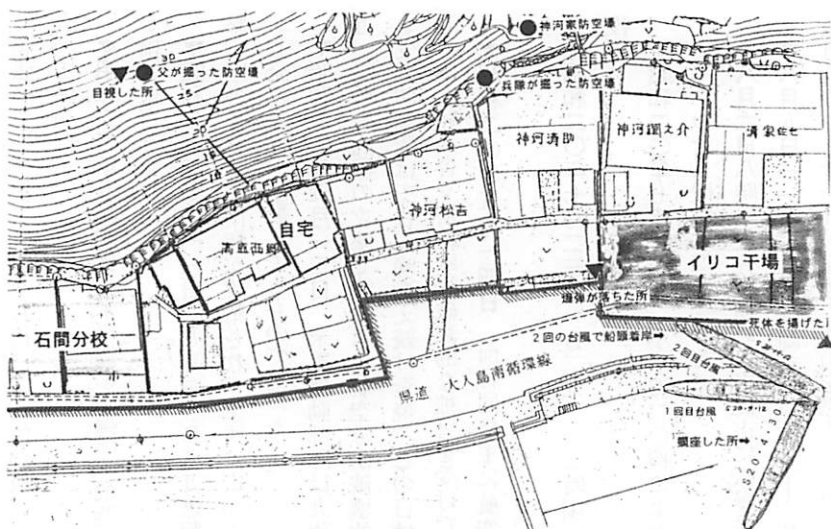
▼昭和二〇年七月二四日 小型機二〇機により朝六時と正午にわたり機銃攻撃を受ける。


▼八月六日八時一五分 初めて広島市に原爆投下

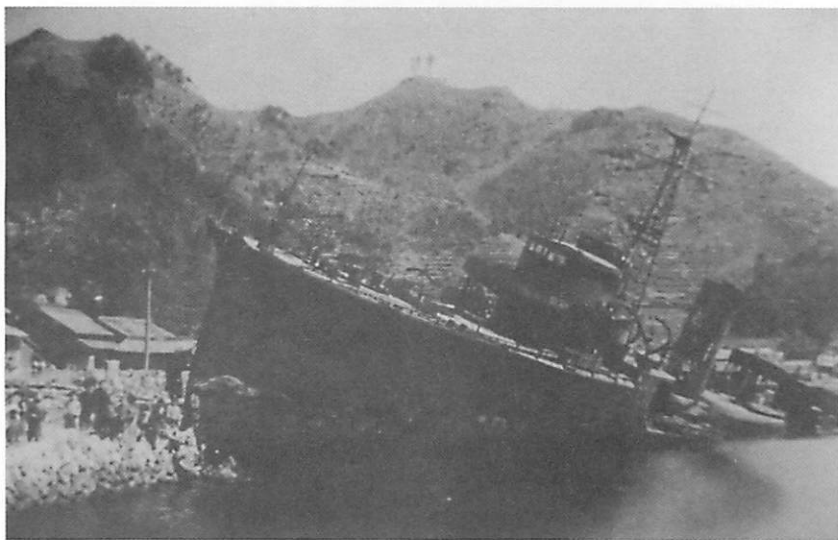
▼八月九日一時二分 長崎市に原爆投下。死者三〇数万人の命を奪われ、原爆の威力を恐ろしく思った。



昭和 20 年 5 月 11 日 B29 より撮影 (爆煙は木材団地付近)



擱座した付近 20年9月17日 枕崎台風で船首が接岸
当時の海岸線 ()



20年10月10日の2回目の台風で接岸、7年間放置された
敷設艇「怒和島」の終姿 曳航され解体された。

アメリカの原子爆弾の投下で日本国民が人類初の犠牲になった。

▼昭和二〇年八月一四日 西谷にロケット弾十一発打ち込まれ、四名死亡（うち恩師の父死亡）七名負傷した。

▼昭和二〇年八月十五日

当区彦神社境内で「終戦」

天皇陛下のお言葉「玉音放送」に聞き入った。

終戦するや米軍艦は目の前の海に何艘も佐伯湾内に入ってきた。また、空には胴体の二つある飛行機が鶴見上空から何百機も頭の上を通り見上げたものです。七〇年経った今でも私の脳裏にあつて終生忘れることはない。

兵隊さん達が引き揚げて行った後、すぐ私たち子供の遊び場になり、私は小船を漕ぎ摺座した艇に乗り込み、艦橋の操舵室で楫を握り面舵・後舵と練った。久保艇長が側に居るようだった。

▼同年九月一七日 午後、台風第一六号が鹿児島県枕崎市に上陸して日本を横断した。この時、艇は錨が漕げて船首が西向きになった。

▼同年一〇月一〇日 一ヶ月も経たぬうち、また、台風

第二〇号が鹿児島県阿久根市に上陸し、ほぼ同じコースになった。その影響で同じく錨が漕げ、艇は更に船首が北西向きになって、イリコ干し場の岸に写真のように乗り上げた。（現在は県道南循環線と物揚げ場になっている）私たちには絶好の遊び場になった。写真で分かるように艇の勾配がよく、錨の鎖をよじ登って、イカリ穴を抜けて甲板に出る。下る時は慎重だった。体がだんだん大きくなって遠ざかった。

浜辺の艇は、七年間放置されていたが、サルベージ船に曳航され、当石間浦の地を去って行った。

▼昭和五八年四月三〇日

大入島公民館で慰霊祭舉行

怒和島の乗組員及びその関係者の戦友会が、昭和五八年五月二〇日、大阪で「怒和島会」をつくられ、戦後三八年後の命日に船員・遺族ら四〇名が佐伯に集まり現地で献花した後、当石間公民館で慰霊祭が行われ、区長さんにお願ひして、当時の様子を皆さんに話をした。

また、艇長のこ子息ら数名を摺座した所や遺体収容の場と様子、艇接岸地や茶毘地の現場、分校跡地等を案内し

て廻った。

その後、平成六年四月二六日に二四人が当浦に再び集まり、戦没者五〇年祭が行われた。

愛知県田原市伊良湖岬の全国海洋戦没者慰霊碑には、一四名の名前が奉納されている。



昭和58年4月30日怒和島会が主催、石間公民館で慰霊祭を挙行。参加者40名
当時の説明をする筆者

【終わりに】

戦後七〇年経った今日、佐伯海軍航空隊跡地の設備は殆ど残っていない。当時の兵舎跡地には最近海上自衛隊佐伯基地分遣隊が新しい隊舎を造り替え、佐伯湾には昔と同じように潜水艦や護衛艦などが大入島小学校沖に停泊したり、女島埠頭岸壁や隊舎前に係留したのをよく見かける。

テレビ等情報の早い今日「戦争」「せんそう」「戦い」「いくさ」と、よく聞くが、子供達はどんな思いだろうか。体験したことがなく実感がないと思う。

七〇年前、我が国が米軍ほか他国から攻撃された國であること。佐伯の街が戦場であったことを知って欲しい。人々の記憶が薄れかけてきているように思う。

中でも佐伯の海辺で起きた戦争とて、敷設艇「怒和島」の最後を忘れる事なく少しでも後世に伝えたい。

直接、戦地で戦火を浴び戦った者でないとは戦争の実感はないと思うが、私はこの佐伯で自分の目の前で実際に起きたことを見聞し、悲惨な目に会った戦争の恐ろしさを身を持って知った。私たち人類は、永遠に平和を願い尊い社会を築いて行かなくてはならない。